

# 専門社会事業と宗教

—特に福音主義との関係—

竹内 愛二

## 1 序 言

マックス・ウェーバーは「経験科学は人間に対して、なすべきことがらを教えることはできない。むしろなしうること一事情によっては一現に意欲してることがら（の客観的な意義）とを教えるだけである」<sup>1)</sup>といたが、しかも学問は何らかの前提を必要とするということを指摘して「すべて学問的研究にたざさわるときには、論理学と、方法論の規則の妥当性というものが前提となっている。つまりその妥当性とは、われわれが世界を研究するばあいの一般的な原理のもっているものである。……それのみかこのばあいには、もっと前提されていることがある。それは学問的な研究をして出てくる結果は『知る価値がある』という意味で重要であるという前提である。そしてわれわれのすべての問題はあきらかにこの前提の中にかくされているのである。なぜなら、この前提は、それとして、もはや学問の手段をもってしては、証明するわけにはゆかぬものだからである。この前提は、その究極の意味にかかわらせてそれぞれいろいろに解釈されるが、その究極の意味というのは、そのあとで、めいめいのぎりぎりの生活態度にてらしてみても、拒否するなり、承認するなり、しなくてはならないものなのである<sup>2)</sup>」とあって、その一つの場合の例として医学の場合をあげ、その一般的前提は生命を維持することと、苦痛をでるきだけ和らげることの両者とも承認されるが、時と場合によって、そのいずれを撰ぶべきかということは医学そのものでは決定できない。たとえば「安楽死」ということ

は、生命を維持するということを犠牲にして、苦痛（病人または家人等の、或は両者の）を和らげるためということと二つの前提が相剋することであるが、これは医学自体はいずれをとるべきかを決定することはできないということを指摘している<sup>3)</sup>。

専門社会事業は慈善事業や、学問の対象や、方法の明確化されない社会福祉事業などから脱皮して、専門社会事業として著しい発達をとげたのであるが、しかも専門社会事業ほど、それを「知る価値」や、「なす価値」があるのか、またかかる価値は何であるかという「前提」的質問を我々に投げかけるものはないと思われる。筆者はつねに専門社会事業を実証的に、或は経験科学的に研究し、実施することを主張し、形而上学的な接近を排しようとしている者であるが、しかし自ら基督教徒であり、また本学における社会学部において専門社会事業の研究をなす者として、どうしてもかかる「価値的前提」を問題とせざるを得ない要請を感じるのである。筆者は神学者でも、また宗教家でもないのであるから、神学的に福音主義について説いたり、或は伝道的にその価値を主張しようとする考えはない。ただ福音主義をあたえられたものとして、社会科学的な専門社会事業の「前提」として、いかなるかわりをもつかということに非常な関心をもっている。たまたま今夏第5回基督教社会事業研究協議会の主題講演を依頼され、この問題と関係深い考察をなす機会があたえられたので、ここにそれをまとめることにしたのである。

註1) M・ウェーバー「社会科学および社会政策の認

識の『客観性』, 河出書房世界大思想全集, 昭和29年版 21, 34頁。

- 2) 同「職業としての学問」, 前掲世界大思想全集, 146-147頁。
- 3) 同上, 147頁。

## 2 専門社会事業とその基礎原理

A 専門社会事業の定義—筆者は多くの人々による専門社会事業の定義の比較研究をなし、それらの最大公約数的な諸特質を抽出し、かつその独自の性質を探求し、筆者自身による定義をみ出した。即ち『専門の $\left\{ \begin{array}{l} \text{個別} \\ \text{集団} \\ \text{組織} \end{array} \right\}$ 社会事業とは $\left\{ \begin{array}{l} \text{個人} \\ \text{集団} \\ \text{地域社会} \end{array} \right\}$ が有する社会関係的欲求 social relational needs を、その他の種々なる欲求との関連において $\left\{ \begin{array}{l} \text{個人} \\ \text{集団} \\ \text{地域社会} \end{array} \right\}$ 自らが発見し、かつ充足するための能力、方法、社会施設等あらゆる資源を自ら発見し、開発するのを、専門の $\left\{ \begin{array}{l} \text{個別} \\ \text{集団} \\ \text{組織} \end{array} \right\}$ 社会事業者が、自己の属する施設・団体を代表して、側面から援助する過程をいう』と。

この定義は筆者が初めて発表してからすでに十数年を経ており、論文や、著書によってたびたび紹介しているもので多くの人々に熟知されているところのものであるが、本論文の性格上煩をかえりみず、もう一度簡単にその主要点について説明しておくことが便利であろう。即ちこの定義によれば専門社会事業は個別社会事業 social casework, 集団社会事業 social groupwork, および組織社会事業 social organization work (or community organization) の3分野にわかれているが、本質的にはいずれも人間の社会関係的欲求、およびその問題をその中心的対象とするものであり、またその方法が「自助の援助をなす to help the self-help」人間関係的なものを中心とするものであるという両面において全く同じ性格のものである。即ちかかる意味でこれらの3分野とも、社会学的な性格をもつ専門職業であって、社会福祉事業のうちに独自の地位をもつものであるから、これらの3分野は社会福祉事業の単なる方法、手段、または技術として論じ去らるべ

きものではない。専門社会事業の科学的成立のための学問的方法論からいって、このことは極めて重要なことである。

しかし専門社会事業は、あらゆる社会福祉事業をなす場合に、人間関係の技術(面接、討議、協議会活動等)によることが不可欠なことはもちろんのことであるから、専門社会事業のこれらの3分野は、社会福祉事業の方法・技術であるという側面をもっているが、それは決して専門社会事業に限っていわれるべきことではなく、たとえば医療によって疾病を治癒して、貧困の問題を解決するのと同じ意味のものである。

次に専門職業ということについて一言すべきことがある。筋肉労働者が物的生産にたずさわる場合ブルー・カラー的職業であるといわれるのに対して、精神的労働者が非物的即ちサービスを生産する場合、ホワイト・カラー的職業にたずさわっているといわれる。このホワイト・カラー的職業は、さらにAおよびBの2種にわかれている。専門社会事業がホワイト・カラーAに属するところの科学的知識と理論に即したものであるのに対して、ホワイト・カラーBに属するものは、単に事務的・機械的・常規的になされるものにすぎないのである。今日我国の公的扶助における仕事の本質や、内容は大体右ホワイト・カラーB級に属するものであって、それは真の意味の専門職業者ではなく、単なる専従者、或は専業者の域を脱しないものとされている。

B. 専門社会事業の社会学的原理—専門社会事業が何故に、またいかなる歴史的発達の過程をたどって、特に人間関係とその問題を、その中心的対象とするに至ったかということは興味ある、また重要なことからであるが、ここでは紙数の関係もあって、その叙述をはぶかねばならない。読者はこの点について、筆者の著書、特にそのうちでも最近の「専門社会事業研究」の第1、および第4章等によって、充分理解していただけたらと思うのである。従ってここでは人間関係をパースンズ等による行為理論、特に言語的行為理論の観点から少しく考察することによって、専門社会事業の科学的本質と、その技術について明らかにすること

にとどめねばならない。

人間関係が人間の相互行為 inter-action の体系であることは改めていうまでもないことである。またかかる相互行為が主として言語によるものとして展開されるのが、人間関係の特質であることも明らかである。さらに言語そのものについての研究も重要なことであるが、これもむしろ社会学または社会心理学自体の研究領域に属することであって、今ここでかかる研究をなしている余裕はない。特に表現象徴行為としての言語ということは専門社会事業にとつて非常に重要な意義をもっているが、この側面の考察も、他の場合（近く発刊予定の「社会福祉学」第2号中の拙稿「ケースワークの社会学的本質」第3項）にゆずることとし、ここでは専門社会事業に直接の関係をもつ、言語的行為ということについてのみ簡単に記述するにとどめる。

人間が万物の霊長であるとか、社会的動物であるなどといわれることは、人間のみが言語能力をもち、かつそれを自由に駆使し、また自由に発達させることができるということと同意義のことである。しかし人間はただ「口頭言語 verbal language」の能力によって自己の心意に従って声帯を自由に操作し得るのみでなく、他の行動や、身振りや、表情や、態度等によつても表現象徴的行為をなすことができ、またそれらを大いに発達させることができるという点でも、他の動物と非常な差異がある。この種の「言語」を、我々は「行動言語 behavior language」とよぶのであるが、ここで重要なことは、例えば青少年の非行や、犯罪のごとき行為も表現象徴的行為としての行動言語の一種であるということである。我々がかかる行動言語によって非行や、犯罪など、およびそれらの動機や、目的の理解をなすことは、従来のただ道徳的に責め立てることを中心とするような、青少年問題対策に比して全く新しい境地を開拓するものといわねばならない。

言語的行為として最後に非常に重要な意義をもつものは「器官言語 organ language」といわれるものである。即ち心理的わけても情緒的な原因によって、人間の消化、呼吸、血液循環等の生理

的機能が積極的、および消極的に影響されることは、我々の日常つねに経験することであるが、かかる情緒的原因が恒常的に存在したり、或は特に重大なものであるとそれらが種々の生理的機能を異常なものにし、さらに進んで種々な疾病となつて、我々を悩ますようになることも我々の夙に識るところである。近年著しい発達をとげつつある精神身体医学 psychosomatic medicine は、かかる器官言語の理解を大いに促進せしめることになつたのである。精神身体医学は、すでに医学界や、精神医学界において著しい発達をとげているのみでなく、パーソンズの行為理論等においても、疾病は多分に攻撃的意味をもつ撤退的行為 withdrawal behavior であるとされている<sup>1)</sup>。

アレキザンダーは、疾病は種々なる原因による機能であると下記のごとく分析して述べている<sup>2)</sup> 即ち

D (disease=疾病) = f (function=機能) of  
a, b, c, d, e, g, h, i, g, ……n.

a—hereditary constitution=遺伝的体質

b—birth injuries=出生時の傷害

c—organic diseases of infancy which  
increase the vulnerability of certain  
organs= 幼児期の臓器の疾患である特殊  
の器官の弱点を増大するもの

d—nature of infant care (weaning habits,  
toilet training, sleeping arrangements,  
etc.= 幼児期の世話の性質、離乳に関する習慣、排便の躰け、睡眠に関する規制等

e—accidental physical traumatic experiences of infancy and childhood=  
幼児期および児童期の災害的的身体的外傷の経験

g—accidental emotional traumatic experiences of infancy and childhood=  
幼児期および児童期の災害的的情緒的外傷の経験

h—emotional climate of family and specific personality traits of parents and sibling = 家族内の情緒的気候及び両

親や兄妹の特殊な人格素質

i—later physical injuries = 成長後の身体的傷害

j—later emotional experiences in intimate personal and occupational relations = 成長後の情緒的経験特に個人的及び職業関係における経験

しかし同時にアレキザンダーは人間の植物性自律神経系の機能の障害が、大体消化器系統（副交感神経系）と、血液循環系統（交感神経系）とにわかれて、各々の系統に属する疾病となって現われるが、それは精神分析的にいて幼児期の口腔的依存と、競争的攻撃とのいずれを情緒的外傷経験 emotional traumatic experience として当該人間がもったかということによって、その特殊性が決定されると図式化して説明している<sup>3)</sup>。

以上我々は言語的行為を口頭言語、行動言語、および器官言語の3種にわけて、各々の一ととわりの説明をなしたのであるが、これら3種の言語はいずれも人間の情緒や、動機などの表現象徴的行為であるという点では全く同じ性質のものである。かくしてこのことは人間が他の動物と異なると、口頭言語の能力をもっているだけでなく、行動言語および器官言語による表現象徴的行為を口頭言語によるそれに切替える能力をもっていることをも示すものである。そしてここにこそ専門社会事業の社会学的基礎原理のもっとも重要なものが存している。即ち我々は専門社会事業をもって、主として口頭言語による人間関係の展開過程であるということが出来る。下に専門社会事業の3分野にあてはめてこの原理がいかに展開されるかを表示しよう。

専門社会事業の三分野	主たる機能	副次的機能
ケースワーク	面接	他の諸種のサービス
グループワーク	集団討議	レクリエーションその他の活動
コミュニティ オーガニゼーション	協議会活動	保健・福祉等の諸活動

故にこの表中の副次的サービスや、活動は「行動言語」として観察され、また理解されるとともに、より適当と思われる場合は「口頭言語」に切

替えらるべきものである。また特に器官言語について医療社会事業の例をとってみると、それは医師による疾病の医学的療法の代りとして、或は補助的手段として、専門社会事業者、特にケースワーカーと患者との間の面接関係によって疾病の治療を促進するものである。即ち器官言語としての疾病は口頭言語を主とする面接によって治療されたり、或は治療が促進されたりするわけである。

以上我々は簡単ではあるが、専門社会事業理論がその3分野のいずれに属するかを問わず、行為的に、或は言語社会学的にいかなるものであるか、またいかに展開されるものであるかということを一応理解することができた。しからばかかる専門社会事業は基督教の中心をなす福音主義といかなる関連性をもつものであろうか。我々はまずこの福音主義ということについて知らねばならない。

- 註1) Talcott Parsons : The Social System, 1952, p. 31.
- 2) F. Alexander : Psychosomatic Medicine, 1952, p. 52.
- 3) Ibid., p. 66.

### 3 福音主義とその諸特性

筆者は神学者でも、また特に宗教社会学を専攻する者でもない。これらの領域では全くの素人である筆者ではあるが、専門社会事業の観点から考察すると、特に使徒パウロによって表明された福音主義の諸特性が非常に密接に関連しているように思われるのである。特に前項において述べた専門社会事業の社会学的性格ということと非常に密接な関係をもつものであると思われるので、筆者はむしろ専門社会事業の社会学的理論に照らして福音主義の諸特性をできるだけ客観的・没価値的に分析してみようと思う。もちろんかかる実証科学的考察には福音主義が、専門社会事業とは異なる次元に属する面があり、従ってまたかかる分析には限界があることを筆者は充分みとめている。同時に他方福音主義の諸要素を実証科学的にできる限りにおいて分析・検討することは、慈善事業や、常識的な社会福祉事業とは全く性質を異にする専門社会事業の今後の発達にとって非常に重要

な意義をもつものと思われる。ここに筆者が神学的、或は宗教社会学的領域における自己の無知をかえりみず、あえてこの論考を試みる所以がある。

筆者が参考のために調べた処によると、関西学院その他の2、3の我国のプロテスタント基督教主義学校がその寄附行為等において表明している「基督教主義」ということは、「福音主義的」という意味に解されてよいようである。まずこの場合の「福音」は、一般に gospel という語の邦訳されたものであるが、またイエスの誕生を天使が告げ知らせたときの「善き音信 good tidings<sup>1)</sup>」とか、「真理の言葉<sup>2)</sup>」、或は「御国の福音<sup>3)</sup>」というように、抽象的な意味に用いられている場合が多いが、また「わたしが最も大事なこととしてあなたがたに伝えたのは、わたし自身も受けたことであつた。すなわちキリストが、聖書に書いてあるとおり、わたしたちの罪のため死んだこと、そして葬られたこと、聖書にかいてあるとおり、三日目によみがえつたこと、ケバに現われ、次に12人に現われたことである<sup>4)</sup>」とある如く、具体的にキリストの十字架と、復活とを伝えることである場合もあり、また四福音書の場合のように、キリストの生涯や、教訓全体を福音ということもある。

次に福音主義 evangelicalism ということは、広義にはカトリック教的に對してプロテスタントの基督教を意味すると考えられる<sup>5)</sup>。そして現実的には使徒信条を信ずることが含意されているようであるが、プロテスタント教徒のなかにも使徒信条を奉じない人々や、教派も少なくないし、またそれを奉じていても、その主義主張には多分に互に異質的なものをもっている。しかし福音主義には共通して

1. 原罪を信ずること、
2. 贖罪の効力を信ずること、
3. 個人的悔改の必要性、
4. 信仰によりて義とせられること、
5. 聖書を信仰の基準として尊重すること、
6. 人の救は全然神の恩恵によるものなることを信ずること

等を要素的にもっている<sup>6)</sup>といわれる。しかしこれら諸要素はポーロによって、もっともよく表明され、特にそのローマ人への手紙第3章21—24節に端的に示されている。即ち

「しかし今や、神の義が、律法とは別に、しかも律法と預言者によってあかしされて、現された。それは、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であつて、すべて信じる人に与えられるものである。そこにはなんらの差別もない。すなわち、すべての人は罪をおかしたため、神の栄光を受けられなくなっており、彼らは、働なしに、神の恵みにより、キリスト・イエスによるあがないによって義とされるのである」と。

ルッターは上記の後半の部分について「注意せよ、これがこの書翰ならびに全聖書の主要部であり、その中心点である<sup>7)</sup>」といったが、ルッターと共に、上に示されたポーロの教えを是認する立場を福音主義ということができよう。下に前掲の福音主義の6要素について簡単に記して各々の意義を少しく明らかにしておきたいと思う。

1. 原罪について—基督教徒は人間は神の姿にせて、神によって創造されたという旧約以来の信仰をもっている<sup>8)</sup>。しかしながらいわゆる「アダムによる原罪」のために全人類は墮落し、神性を失い、また「神の栄光」を受くるに適しない者になった。しかもなお神は人間の父であり、人間は互に兄弟であるとの信仰は牢固として抜けなくてもちつづけられている。

2. 贖罪の効力—かかる原罪から人間は脱することはできないが、ただ「神の独子」たるキリストの十字架上の死によって贖罪されるのである。それ故に人間にはキリストの足あとをおい、或はキリストの生活を模倣することは可能であるが、人間はついにその罪を自らの力によって贖ふことはできないのである。

3. 個人的悔改—人間はキリストのみによる贖罪によって義とされるが、この体験を口に表現しなければ悔改めたとはいえない。即ち「なぜなら人は心に信じて義とされ、口で告白して救われるからである<sup>9)</sup>」し、また「だから、互に罪を告白<sup>10)</sup>」せねばならないのであり、また「もし、わたしたち

が、自分の罪を告白するならば、神は……その罪をゆるす<sup>11)</sup>」であろうという信仰が基督教徒によって強くもたれているのである。

4. 信仰義認一人間の罪とは決して個人的な、法律的な、或は社会的なものではなく、実に人類全体の原罪が問題となるのである。故に個人の努力や、法律的処理などによって、かかる罪が赦されるものではない。ただキリスト（の福音）を信ずる「キリストにおける信仰」のみによって、人間は義とされ得るものである。即ちキリストに対する信仰の行為ではなく、キリストにおける、或はキリストによってもたしめられる信仰によって義とされるものである。

5. 信仰の基準としての聖書—信仰義認ということは必然的に教会や、神学などによって赦罪がなされるという考えから、聖書こそは信仰の基準であるという信仰の大転回を人々になさしめる。聖書が信仰の基準であるということは、聖書の解釈は各人自由であるということの意味しているから、このことを主張したルッターは文字どおり、カトリック教会の教理や、組織にプロテストする者となったのである。

6. 神の恩恵としての救い—上第2に掲げた贖罪ということは、人間自らによるものではなく、キリストが無実の罪を自ら負うて十字架の死をもって人間のために贖罪したことを意味しているのであって、人間自身は何の価も払わずに—勿論人間はいかなる価を払っても無益なのであるが一罪を赦されるのである。即ちここに取引関係とは全く異なるところの「恩恵<sup>カリスマ</sup>の賜物 the gift of grace」がもっとも重要な意味をもつことになる。福音ということの直接の意義はここにその中心的なものがあるといえよう。

註1) 新約聖書ルカによる福音書第2章10節。  
 2) 同 エペソ人への手紙第1章13節。  
 3) 同 マタイによる福音書第24章14節。  
 4) 同 コリント人への第1の手紙第15章3—5節。  
 5) The Oxford Dictionary of the Christian Church, 1958.  
 6) 日曜世界社「基督教百科辞典」, 昭和14年版。  
 7) カール・バルト著 (吉村善夫訳)「ロマ書」上巻, 昭和34年, 184頁。

8) 旧約聖書創世記第1章26—27節。  
 9) 新約聖書ローマ人への手紙第10章10節。  
 10) 同 ヤコブの手紙第5章16節。  
 11) 同 ヨハネの第1の手紙第1章9節。

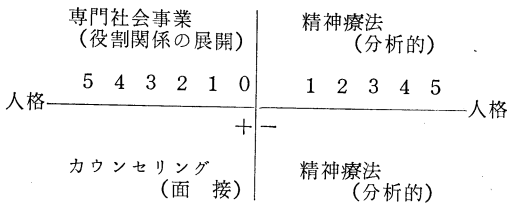
#### 4 専門社会事業からみた福音主義

フロイドは精神分析的認識をコペルニクスの宇宙学説、およびダーウィンの種源論とともに、人類の歴史に起った3大発見の1つに数えている。そしてそれらの発見はいずれも人類の自尊心を著るしく傷つけた代りに、その反動として、人類の知識をはなはだしく増進し、人間のもつ世界観に絶大な変化をおよぼしたといっている<sup>1)</sup>が、我々は同様に新しく発達しつつある専門社会事業の理論と、実践とは、基督教の中心的教訓たる福音主義そのものへの理解をも、大いに促進し、また可能ならしめ、従って福音主義の現実生活との関係の理解がまたそれによって非常に促進されていることをみとめざるを得ないのである。我々は次にこのような意味で、福音主義が、専門社会事業の立場からみて、いかように理解され得るか、2, 3の点をとりあげて考察するであろう。

A 原罪について—すでに述べた如く、この原罪という福音主義的概念は、元来神自らの姿ににせて創造された人間であるのに、人間が神の意志にそむいて「原罪」を犯して、墮落した墮罪の状態 the fallen state にある人間の存在を示すものである。しかも人間は「父なる神の子」であり、また「人間は互に兄弟」たることを基督教は教えている。しかしてここに人格の尊厳ということの基礎が見出されるのである。さらにこの人格ということは現実的にはペルソナ即ち「仮面」を意味し、かくして、人格の本義は人間各々がその役割をはたすところに発揮されるものとされる。この役割ということとは、今日の社会学において中心的な意義をもつ概念である。即ち我々が社会体系というとき、それは役割体系のことを意味し、厳密な意味での社会学特有の対象は役割であるといわれている。社会が成立するために、人間は少なくとも職業的、家族的、および市民的の3種の役割をはたさねばならない。しかるに現代人は「人格市場 personality market」において、諸

種の役務を売って、物質的成功をかり得ることに専念せざるを得なくされている「市場志向 marketing orientation」的存在におとされていといわれる<sup>1)</sup>。

専門社会事業においては、人格の病理的側面または無意識的・内在的・抽象的な問題については精神療法的に理解され、治療されるが、人格や、行為の意識的・外在的・具体的な問題に対しては、ケースワークや、カウンセリングとして、主として「口頭言語」による吐露を通じて、それらの理解・解決を企図するのである。この場合社会学的に言えば、例えば犯罪・非行のごときは、反社会的、即ち消極的役割と考えられ、専門社会事業の3分野、或はそのいずれかによって、社会的に望ましい、即ち積極的役割に転換せしめようと企図されるのである。特にグループワークにおいては、口頭言語的グループ・ディスカッションに加えてレクリエーションその他の諸種の活動を役割的に遂行せしめるといふ点から非常に効果的なものである。今人格の角度から専門社会事業、カウンセリング、および精神療法の3者の相互関係を図示して明らかにしよう。



同様に福音主義においても、人間はただ罪の存在として、即ち神の栄光を受くるにたらぬものとして、神の叱責を受くるのみの存在ではない。「<sup>カリスツ</sup>恩恵の賜物」によって救われた人間は、「神の管理人」(ペテロの第1の手紙第4章10節)であり、「<sup>キリスト</sup>キリストのからだ」(コリント人への第1の手紙第12章27節)、また「神の宮」(同第13章16節)であって、神に対して、また隣人に対して、はたすべき多くの役割をもっている。

しかしながら人間は、原罪によって可能的神性を放棄して、墮罪の状態に陥っている。このことは宗教的には、人間の性質を楽天的に性善説などで割り切ってしまうまい、善悪両面をもつもの

という対者並存的 ambivalent に人性をみようとすることを意味している。即ちポーロは「わたしの欲している善はしないで、欲していない悪はこれを行っている<sup>3)</sup>」といて、「わたしの肢体には別の律法が<sup>4)</sup>」あることを指摘しているが、これにきわめて類似した事実として、専門社会事業が大きい貢献を受けている精神分析学においては、この対者並存性ということは、無意識 the unconscious, 過去 the past, 転嫁 transference および抵抗 resistance 等とともに、もっとも重要な概念の1つをなしている<sup>5)</sup>。

さらに専門社会事業においては、元来これまたフロイド等の影響によって重視している3概念の1つとして、「人間行動の基盤としての欲求 the need basis of behavior」(他の2つは「精神現象における決定論の概念 the concept of psychic determinism」, および「家族の研究 the study of family<sup>6)</sup>」) ということがあるが、すべて人間の欲求は観念的、或は理想的には充足可能であるにもかかわらず、現実的にはそのすべての充足は不可能であるのみならず、かかる不可能性から、種々なる問題に遭遇する運命をさげ得ないものである。しかし人間の問題を善悪の対立としてのみ考えず、欲求、およびその不充足というように相対的に考えると、人間の多くの問題の理解や、解決が完全にではないが、大いに可能になるであろう。また前掲したフロイドの貢献の他の1つである「精神現象における決定論の概念」の視野から、特に行為の無意識的動機 the unconscious motives of human behaviors についての研究の発達は、その中で善悪対立して「なんというみじめな人間なのだろう<sup>7)</sup>」とポーロをしてなげかした人間の存在の少くとも心理学的な面について、ますます深い洞察を可能ならしめつつある。

しかしこの原罪または墮罪の概念の専門社会事業からみた、さらに一層重要な意義は、前に引用した、福音主義を示すポーロの言にある「そこにはなんらの差別もない。すなはち、すべての人は罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなっており、彼らは価なしに、神の恵みにより、キリスト・イエスによるあがないによって義とされるのであ

る<sup>8)</sup>」ということの中に見出されるものである。この「すべての人が罪を犯したため神の栄光を受けられなくなっており」という点では消極的に、そして「働なしに神の悪みにより、キリスト・イエスによるあがないによって義とされる」機会をすべての人間があたえられるという点では積極的な意味で、全人類の無差別平等的の存在ということを示現している。このことは思想的、或は哲学的には民主主義の基調をなすものであるが、専門社会事業が今日ますます強い影響をあたえられつつある文化人類学においては、文化的多元論とか、文化的相剋などの現象についての研究が著しい発達をとげつつあって、その立場からいえば、人間が人種や、民族や、国籍などを超えて、或は底流的に人間共通の欲求のあることをみとめざるを得ないという結論が引出されることになったし、またパーソンズ等のいうように、人類社会を全社会体系とみるならば、自己の属する社会も、他のものも、みな亜社会体系 sub-social system であって、従ってそれらのもつ文化も亜文化体系の性格をもつものであり、従ってまたこれらの亜文化体系間の相異は相対的なものにすぎないということになる。即ち文化は外衣の如きものであって、人間の基本的性格や、能力等には左して大きい差異はないという結論が今日の文化人類学の到達するところのものとされている。かかる文化人類学は今日すでに基督教の外国宣教事業や、その基礎理論をなす比較伝道学等に多く取り入れられている。福音主義のこの第一の原罪（および墮罪）という概念は、かくして専門社会事業的なものとの連関性を我々に感じさせるように思われる。

いま一つこの点に関連していうべきことは、特に専門社会事業者自身についてであるが、福音主義的にいって、彼も罪を犯した者であるに相違なく、この点からいって、対象者と「なんらの差別もない」者である。従って、専門社会事業者は対象者を道徳的に審判する権力は少しもないのである。「……すべて人をさばく者よ。あなたは弁解の余地がない。あなたは、他人をさばくことによって、自分自身を罪に定めている。さばくあなたも、同じことを行っているからである<sup>9)</sup>」といわ

れていることは、専門社会事業においても、「非審判的態度「non-judgemental attitude」として、その重要な原則の一つを成している。そして彼は対象者のあるがままの状態および行為を受け容れ (accept) ねばならないとされている。ティリッヒによれば、福音とは一言でいえば、「受け容れるにふさわしくない者を受け容れること acceptance of the unacceptable<sup>10)</sup>」なのであるが、今日専門社会事業中に大きく取り入れられている精神療法の過程は、パーソンズもいう如く、(1)許容性 permissiveness, (2)支持 support, (3)交互性の拒否 denial of reciprocity, および(4)報酬の操作 manipulation of rewards の順をおうて展開されるものである<sup>11)</sup>。即ちワーカーは対象者の状態と、彼が吐露することをそのまま聴き取り、またかかる吐露を不安なくさしめるように援助するのであるが、かかるケースワークの初めの二段階が「受容的」なものであるということは、福音主義の主張することに近似したことを実践しているといえるであろう。

またこの人間の墮罪状態ということから、我々はエロース的(人間的)愛と、アガペー的(神的)愛ということについて考えさせられる。

ランク Otto Rank は「二種類の愛の間の葛藤に大きな意味を付している。一はエロース、すなわち要求し、吸収し、他人を自分の目的のために用い、偽装した自己愛の要求を含んでいる愛である。……他の種類の愛はアガペー、即ち自ら赴き、自らを与え、何よりも愛する人の幸福を望むところの愛である<sup>12)</sup>」といっているし、またシエリル L. J. Sherrill も「我々はエロース愛は自己の立場を保護し、高めようとする<sup>13)</sup>」ものであり、それは「……もし妨げられなければ、それよりも豊かなる何物かに成長しえず、また妨げられなければ、敵意が生起する。このようにして起された敵意は、もし初期の動的関係においてアガペー愛と出会うならば、その関係内で処理される……<sup>14)</sup>」となし、「有効な(精神)治療にあっては、サッファラーは他者から彼に向けられたアガペー愛に会う。……彼が今や出会うアガペー愛の形態は、治療者より来たり、自己のエロース愛



を満足させ、その敵意、不安、罪責を処理させ、アガペー愛をもってこたえさせるのである<sup>15)</sup>」といているが、これはむしろアガペー愛そのものをいっているのではなく、アガペー的愛としかえるべきものであると思う。即ちシエリル自らもアガペー愛そのものについていう如く、「神は、アガペー(愛)であり、十字架はその愛の何であるかを現わすだけでなく、その愛が我々の世界に、尽きることなく、あたえられることをも示している。ここに宇宙的な規模におけるアガペー愛が、人間の自己破壊的エロース愛の悪循環をうち破って入ったのであり、何人をも彼ら自身の敵意からときはなち、その不安を除き去り、その罪責を取り去ることになったのである<sup>16)</sup>」。即ち福音主義的にいうならば、墮罪した人間の愛は、どこまでもエロース的的愛であるか、たかだかアガペー的愛であるにすぎない。即ちエロース的愛はもちろんアガペー的愛も人間に発するものであるのに対してアガペー愛そのものは神からのみ出ずるものであるから、基督者の倫理的行動がいかに高く、また潔いものであっても、それはどこまでもアガペー的なものにとどまる。即ち人間の愛のわざは、トマス・アケンピスのいう「基督の模倣」のごとく、象徴的なものにとどまるか、或は人間による「キリストにおけるアガペー愛への悔改めと応答」<sup>17)</sup>にすぎないのである。しかして我々人間は結局かかるアガペー的ではあるが、どこまでも人間愛の行動や、生活をなし得るのみである。即ちかかる意味でこそ「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたし(キリスト)にしたのである<sup>18)</sup>」し、かくして「わたしたち(人間)も互に愛し合うべき<sup>19)</sup>」ものなのである。

そこで我々は等しく人間の愛ではあるが、エロース的(本能的・生物・社会的)と、アガペー的(道徳的・宗教的)とにわけて、特にエロース的的愛の生起と、発達とを時期的に眺めてみよう。

母胎は胎児の生活においては栄養、空気、温暖、および保護に対する四種の欲求が、要求する必要もなく、無条件で、また完全に充足される理想的なものである。母胎がかかる理想論的なもの

であるということは、「母のおもは神の愛」といわれることと最も密接な関係をもつことではあるまいか。しかるに人間は出生という、胎児にとっては僅か数分間の経験が、その生活を一変して、ことごとくに要求不充足の苦味を味わねばならないこの世の最初の生活に逐い出されるのである。即ち人間はこの世に「失樂園」的に立ち現われさせられるのである。かかる経験は、もちろん無意識的にはあるが、新生児に深刻な「心理的外傷 psychological trauma」をあたえ、後に人々からの分離の経験が深刻であると、かかる外傷が、いわばうずき出して、種々な問題の間接の原因となるから、この出生外傷 birth trauma ということが非常に重視されることになる。

新生児の母(または母の代理者)との関係は、エロース的にもっとも重要なものである。即ち乳児期の子どもの欲求は、すべてその生死にかかわるとき重要なものに対するものであるが、かかる欲求を、子どもは母によってのみ充足する他はない。即ち新生児は母に「依存」することによってのみ、その生命を保つことができる。ここですでに人間の生理的生活が、全く人間関係の如何に依拠するという重大な事実が生起するのである。かかる依存期は人間の場合もっとも長いのであって、その間種々な問題が起り、欲求不充足に陥っても、特に新生児は言語未発達のため、それを表現することができず、ただ自己に内在化せしめ、従って自己の性格中に内蔵せしめる他はなく、かくして幼児はすでにこの期に大なり小なり神経症的人格の基礎を築かせられるのである。

「母の胸は平和と安全のみなどである」といわれるが、それは人生においては、もっとも母の胎内に近似した場所であることを意味している。従って母側の欲求や、事情から子どもを抱きすぎたり、或はその他の形で、子どもを「過保護 over-protect」したりすると、子どもは独立した行動をなすことが困難になったり、或は家庭内にとじこもって、広い社会生活が困難になったりする。かかる状態を「巣ごもり nesting」ということができるが、その極端な場合、結婚したがらなかつたり、或は結婚しても、「里帰り」ばかりしてい

るようなことになる。故に授乳や排便等に関する規則正しい躰けが必要になり、特に「母の胸」や自己にとじこもってしまわないように、子どもに玩具や家庭の他の人々や、長じては近隣や、一般社会の人々に接触せしめ、それらに対して、関心・興味をもつようにしむけねばならないのである。

子どもが四才位になると、異性の親に、特に興味をもつようになる「エディパス期」に入るのであるが、それは同性愛では人間種属の発展は不可能な故にである。かかる複合 complex は象徴的に骨肉姦を意味しているから、子どもはそれをさけて、将来父母に似た理想の異性者と結婚しようとし、父母との「不倫な」関係をさけようとする人間の始原的遺産 archaic heritage としての欲求が生じ、ここに性は抑圧されて、子どもはいわゆる潜伏期 latency に進むのである。しかしこのエディパス期の意義は、ただかかる性心理学的なものにとどまるものではない。即ち人間の役割関係即ち社会体系の角度からいうと、まず母子間の2単位のものから、異性親を取り入れる4単位のもの、将来の夫、或は妻を心理的に取り入れた8単位的なもの、或は兄弟姉妹や、祖父母や近隣者等を取り入れた16単位、32単位等のものとして、社会体系は漸次微視的なものから、巨視的なものへと拡大されてゆく、その抑々の初めの契機をなすものが、このエディパス的複合期であるという意味から、それは社会学的にも、非常に重要な意義をもつものである。

さきに我々は「巣ごもり」ということをいったが、家族内の生活様式はある場合、家族外での生活にもち出され、いわゆる擬似家族的なものとして、たとえば親分子分や、「血をすすって契りあう」兄弟分などの人間関係が、人間の職場や、一般社会生活の場面で猛威をたくましくすることがある。そしてまたエディパス的「父」が、宗教や国家権力などと結びついて、多くの困難な問題を生起せしめ、また富や、機械や、軍備などに強大な権威をもたせようとする反人間尊重主義的アンタイ・ヒューマニスティックな傾向が、いまや著しくなりつつある。我々はさき

にフロムの「人格市場」という概念をあげたが、この点からいって、それは現代文明のもっとも重大な問題といわねばならない。

以上我々は人間愛のエロース的生起と発達について一瞥したが、人間はかかるエロース的愛の問題をアガペー的愛、或は極端な場合アガペー愛そのものであると強弁することがある。即ち『神を愛している』といいながら兄弟を憎む者は、偽り者である<sup>20)</sup>』と聖書に言われていることは、今いっていることの反対の表現であろう。また精神分析学において「贖罪の山羊 scapegoat」ということがいわれている。即ち美しいことばなどによるまことしやかな説諭等が実は自己の罪を弱者などに転嫁しようとする意識的・無意識的意図のものである場合の心理的機制なのであるが、また「善をもって悪にむくいている」と弁明せねばならぬ「反動形成 reaction formation」の機制や、或はまた劣等感の代償作用として「兄弟愛」的な行動に出る場合等は、客観的にいってエロース的愛をアガペー的愛であると強弁することの例であるといえよう。

B. 贖罪の効果と信仰義認及び恩恵の賜物—以上述べたように、人間はすべて「価なしに、神の恵みにより、キリスト・イエスによるあがないによって義とされる」のであるが、このことは人間自らによるいかなる努力も、贖罪をかちうるものではなく、ただ神の恵み即ちキリストの十字架の死によってのみ、人間は義とされるのであって、人間側ではこの事実を信ずる信仰のみが、かかる義認の因子となることを示している。しかし同時に福音主義は倫理的<sup>21)</sup>なものであって、人間はかかる恩恵をいたずらに受けることなく、「キリストの福音にふさわしく生活<sup>22)</sup>」し、「世界を相続させるとの約束<sup>23)</sup>」にかなうものとならねばならないことを人間に命ずる。故に人間は墮罪した者ではあるが、なおかつ倫理的行動と生活をなすように義務づけられている。

C. 個人的悔改—「恩恵の賜物」への信仰が人間を義とするのであるが、かかる信仰は告白されることによって、人間を救いに至らしめると福音主義はいう。即ち前述したように「……人は心

に信じて義とされ、口で告白して救われる<sup>24)</sup>」し、「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は……その罪をゆるし<sup>25)</sup>」、また神への告白を祈りによってなすのみでなく、「……互に罪を告白し合う<sup>26)</sup>」ことが勧告されている。福音主義の告白に関するかかる勧告は、その後基督教会や、その他の団体によって実行されて来ている。即ちカトリック教会や、聖公会などにおける神父や、牧師への「告解 confessional」や、また広く MRA の略称で知られているかの道德再武装運動 Moral Rearmament Movement における小集団の人々によるわかち合い sharing などはその著明な例である。かかる告解や、わかちあいが宗教的なものであり、従ってその中では理論的にはエロース的な問題とは次元の異なる問題が告白され、或は語り合われている筈であるが、現実にはいかなる問題でも取扱われているのを、牧師が信仰的に解釈し、理解するにすぎないのである。

この告白ということについて、この他にも一、二の問題がある。まずその一つとして、告白者の心底にわだかまっている、あらゆる事柄の吐露をなすことにはなっていないので、告白の真価が発揮されないでいる。故に牧師がむしろ精神分析的吐露の理論や、技術を適用して、告白者の不安や、敵意や、罪責感を充分吐露させて、それらを福音的立場から理解し、解釈したならば、単に治療的のみでなく、福音主義的告白として一層適切なものになることと思われる。

また牧師自身の側においても、この点について考うべき問題がある。即ち今日説教中心主義の誤った理解のもとに、牧師が自己の情緒や、心理的葛藤を「身代り者」<sup>スケープゴート</sup>としての信徒たちに吐露するような場合、牧師のエロース的愛の問題がアガペー的愛のそれに意識的或は無意識的に切替わられているといわねばならない。かかる事象の精神分析的理解からいっても、現代の基督教或は基督教徒が福音主義に復帰せねばならない一つの理由があるといえよう。

専門社会事業、特にその代表的分野であるケースワークにおいては、いわゆる「傾聴面接 listening-to interview」がもっとも重視されているが

これはとりもなおさず、表現象徴的行為としての、クライアント(対象者)による口頭言語的「吐露 catharsis」を意味するものに他ならない。かの「告解」においては、罪の告白は、受け容れられるに適しない者が受け容れられる神の恩恵の賜物への信仰によってなされるものであるから、福音主義的に重要な使命をはたしている。即ち告解者は心中の罪を吐露し、かかる罪の存在をも「受け容れ」られるから、少なくとも一時的に心の平和を得ることができる。しかしこのことはどうかすると性心理学的に色々な問題を提起することが考えられる。即ちかかる告白は往々にして性行為と類似の性質をおびたものになり、オルガズムの代替作用の如きものとなる場合があるときえいわれる。ともかくもかかる告白は、告白者のエロース的愛の問題即ち心底の無意識心裡の情緒的葛藤そのものを緩和・解消するものではないので、かかる告白は、むしろ反復的に要求されることにもなり、また告白それ自体の享樂を求めるところから、却って不道德な行為などが追求されることにもなりかねないのである。

しかるにケースワークにおいては、その傾聴面接は全く対象者による吐露を中心としてなされるときともに、吐露されたことがらば、それを対象者に指摘または説明すると否とを問わず、少なくともワーカー自身は、それを理解するのである。かかる科学的理解には、個々のワーカーによって深淺の差があり、また同一のワーカーにおいても、時と場合によってその程度にも差異を生ずるのであろう。即ち専門社会事業としてのケースワークにおける吐露は、人間の実存の深淵的な問題の理解には不十分なものであるかも知れないが、なお人間の日常の問題や、それから生ずる精神的葛藤は、ずい分深刻なものでも、相当経験科学的に把握・理解できることは、ケースワークや、カウンセリングの長い経験によって実証し得られることである。

いま一例をあげてみると、ある基督教信徒が、その愛する息子を自殺によって失ったが、父は信仰的な立場から、若くしてこの世を自ら去っていった愛子の一生を回顧し、特にその最期におい

て、表情を一変し、喜悦にみちたような笑顔をもって息を引きとったことを、主なるキリストに迎えられた故であろうと信じ、この愛子を神あたえ、また取りたまうたと信じて神を讃美したことを追想録に記している。これは真に立派な信仰的態度として我々もまた讃歎を惜しむものではないが、かかる信仰的態度のみでは、世の自殺青少年の数を減少せしめることはできないのみか、かく「死を讃美する」ことによって、かえって自殺者の数を増すことにもなりかねないのである。他方我々が科学的に自殺の心理や動機等について一般的理解をもつとともに、個々の自殺未遂者等について我々が前にあげたアレキザンダーによる疾病の諸原因等を参考に研究し、また自殺が「自己自身に向けられた攻撃性」の結果であるという精神分析学的理解や、或はまた人間において、特にその社会関係の欲求不満が「出生外傷」を加重し、母の胎内への復帰を願望する心理や、また人間が有機物として、この世の悪戦苦闘にたえられなくなり、むしろ無機物に環元して「母なる大地」の中に永遠のいこいを得たいと念願する「死の本能」というフロイド等の理論は、自殺未遂者の個々のケース・ヒストリー等の研究によって理解され、他の自殺の予防のために大きい効果をおよぼすであろう。テイリッヒも今日の宗教家や、神学者は人間の無意識的動機ということの理解によって、人間の実存的理解に大きい貢献を受けているといっている<sup>27)</sup>。今日牧会カウンセリング pastoral counseling が我国でもようやく宗教界内外の人々の注意をひくようになったのはむしろ当然のことといえるであろう。

D. 信仰の基準としての聖書—宗教改革は、自由主義や、個人主義思想の発達の最大のファクターとなった。即ち原因としても、また結果としても宗教改革は、これらの思想と密接に結びついている。かかる自由主義・個人主義のプロテスタントの意義は、ルッターの信仰の基準として聖書を何よりも尊重するというところに、もっとも著明に現われている。即ち前述した如く、聖書を信仰の基準となすということは、聖書をよむ人個々の自由な解釈にまかすことを意味している。ルッター

による宗教改革の根本精神は、宗教制度の力を救いのために万能とはみとめず、聖書をもって信仰の基準となし、個々人がそこから得た福音への信仰によって義とされるという宗教的自由主義・個人主義の精神にもっとも明らかに示されているが、このことは個人的悔改を重んずるという福音主義の他の特性とともに、非常に重要な意義をもつものである。かかる個人主義の精神がケースワークと一脈相通ずるものをもっていることは明らかであるが、しかし専門社会事業は決してケースワークに限られたものではなく、グループワークおよびコミュニティ・オーガニゼーションの2大分野が他にあることを忘れてはならない。特にコミュニティ・オーガニゼーションは、従来近隣のごとき小地域社会のためのものにすぎないもののように考えられがちであったが、理論的にはパースンズ等による微視的<sup>ミクロ</sup>と、巨視的<sup>マクロ</sup>社会体系の、亜体系概念による統合の理論、また現実的には、特に後進国開発に適用されつつある地域社会開発 community development の実際の展開のごときは、専門社会事業が一面個人の欲求や、その問題に強い関心をもつものであるとともに、他方全体社会、或は社会制度や、社会体制等の問題をも取り上げるものであり、また取り上げざるを得ない必然性をもっていることが、急速に理解されつつある。

人あるいはかかる問題は政治の領域に属し、専門社会事業の埒外にあるものではないかというかも知れない。今ここにこのことについて掘り下げて議論する余裕はないが、1つだけ我々が記憶しておくべきことがある。それは政治の「悪魔的性格」ということに関してである。これを社会心理学的にいうと、政治は権力動機の強化、或は悪化した権力複合 power complex、或は権力神経症 power neurosis ともいうべきものに災いされる必然性をもっている。かかる権力神経症的な性格をおびた社会行為 social action の弊害をみとめるとともに、コミュニティ・オーガニゼーションにおける口頭言語を主として使用する協議会活動 council activitiesこそ権力中心の政治活動にかわるべき社会行動であるという主張が、この際大

いに強調さるべきであろう。かく考えるとき福音主義の自由主義・個人主義的精神に「神の国の福音」の信仰が加えられる必要があるといわねばならない。このことはまた近來職域伝道や、コミュニティ・チャーチ運動が強調されつつあることとも関連のあることである。

- 註1) 丸井清泰「精神分析学入門」, 昭和24年, 2頁。  
 2) Erich Fromm: Psychoanalysis and Religion, 1952, p. 100.  
 3) 新約聖書ローマ人への手紙第7章19節。  
 4) 同 23節。  
 5) H. H. Aptekar: The Dynamics of Casework and Counseling, 1955, pp. 25—30.  
 6) 竹内愛二「専門社会事業研究」, 昭和34年, 200頁。  
 7) 新約聖書ローマ人への手紙第7章24節。  
 8) 同 第3章22—24節。  
 9) 同 第2章1節。  
 10) 昭和35年6月9日, 関西学院にけるパウル・テイリッヒの講演「神学に対する実存主義の意義」中の言。  
 11) T. Parsons and others: Working Papers in the Theory of Action, 1953, pp. 239-241.  
 12) L・J・シェリル著(平賀徳三, 気仙三一訳)「罪の心理とその救い」, 1954年(昭和31年訳), 60—61頁。  
 13) 同 216頁。  
 14) 同 217頁。  
 15) 同 218頁。  
 16) 同 234頁。  
 17) 同 247頁。  
 18) 新約聖書マタイによる福音書第25章40節。  
 19) 同 ヨハネ第1の手紙第4章11節。  
 20) 同 20節。  
 21) 同 ローマ人への手紙第12章等に示される如く。  
 22) 同 ピリピ人への手紙第1章27節。  
 23) 同 ローマ人への手紙第4章13節。  
 24) 同 第10章10節。  
 25) 同 ヨハネの第1の手紙第1章9節。  
 26) 同 ヤコブの手紙第5章16節。  
 27) パウル・テイリッヒ前記講演中の言。

## 5 福音主義からみた専門社会事業

以上我々は専門社会事業の立場から、福音主義の諸特性について考察したのであるが、次に我々は逆に福音主義の観点から専門社会事業についていかに考えられるかということ述べるべきである。筆者は宗教家でも、神学者でもないのであるから、かような立場から何もいう資格はないので

あるが、むしろ「専門社会事業の側から観た福音主義の立場」とでもいうべき立場から、専門社会事業について、2, 3のことを取り上げて考察しようと思う。

A. 専門社会事業は福音主義とは異なる次元にある。前項において述べたように、我々は人間の生物・社会的成長・発達をエロース的愛という角度から眺めたのであるが、人間は人間的なものではあるが、聖愛、または神の愛に近似した愛即ちアガペー的愛を体得し、それを強化・発達させ得る場合がある。まず一般的にいて、基督教徒の結婚式等にいわれること、即ち「クリスチャン・ホーム」を築くとか、「あなたたちの家庭の主人はキリストである」などということは、彼らの生活において、人間の本能や、また色々な事情等にもかかわらず、信仰的に美しく展開される、即ちアガペー的愛の支配する家庭生活のあり得ることを示しているし、我々は現実にかかる家庭の例をしばしば見出すのである。また基督者はエロース的愛の生活からアガペー的なそれへ、切替えることを要請される。即ち「わたしがきたのは、人をその父と、娘をその母と、嫁をそのしゅうとめと仲たがいさせるためである。そして家の者がその人の敵となるであろう。わたしよりも父または母を愛する者は、わたしにふさわしくない<sup>1)</sup>」とか、「わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子、もしくは畑を捨てた者は、その幾倍もを受け、また永遠の生命を受けつぐであろう<sup>2)</sup>」などといわれていることは、その例であろう。また基督者の結婚式に必ず引用される「それゆえに、人は父母を離れてその妻に結ばれ、ふたりの者は一体となるべきである<sup>3)</sup>」といわれていることは、ただ人間的に男女が結ばれることをいったのではなく、むしろ新家庭を教会の細胞組織と考えるべきことをおしえたものであって、アガペー的愛の訓えの一例と考えてよいものであろう。

この点から教会そのものについて一言すれば、聖職者や、役員等が徒らに権威を独占して、いわゆる階統的カリスマ<sup>4)</sup>的な存在になることは、むしろエロース的愛の端的な現われであるし、また儀式や、感情吐露的説教等による神秘主義の押し

付けは人々をして徒らに現実生活からの逃避としての教会生活を追求せしめることになる。かかる神秘主義的態度や、行事が性心理にも通ずるものがあることは、すでに我々が指摘したところである。特に我々がいうところの「見えざる教会」はあくまでもアガペー愛的なものでなければならないのである。

また社会・国家の生活においても我々は擬似家族的、或は全体主義的、または独裁的なものを排し、人間がすべて兄弟同胞であるという真に民主的な生活をなすように、我々はつねに基督教によって教えられて来たことはここに繰返していう必要はない。さらに国際関係においても、軍備や、富や、権力を獲得するための科学的発明・発見などの面でのみ互に競争したり、或は帝国主義的植民政策から局地的紛争を利用しようとしたり、或は共存とか、平和とかいうことばを口にしながらか、実は自国の利便や、目的達成の手段を追求している如きは国家的自己愛ナーションズムにすぎないものであるが、しかも同時にアガペー愛的な人類愛や、「愛敵の精神」は、今日の国際政治のうちに、わけても世界平和の運動などの中に着実に根をおろしつつあると見て差支えないであろう。

専門社会事業における吐露ということ、ワーカーによる「傾聴のかまえ」を必要とするものであり、そしてまたワーカーの人格や、態度が非常に重要な関係をもつ人間的なものである。他方福音主義における罪の告白は福音を信ずる信仰の必然的随伴物としてなされるものであって、決して告白がなされるから人間が義とされ、或は救われるという性質のものではない。神への絶対の信仰が、人間のかかる告白を可能ならしめるのである。故にケースワークにおける吐露はワーカーによる「受け容れられるにふさわしくない者の受容」が、許容や、支持の形でなされることは、福音主義的な性格をおびているものではあるが、福音主義的告白そのものとは次元を異にするものといわねばならない。即ち福音主義的告白は神によるものであるのに対して、ケースワーク的吐露はどこまでも人間による人間相手のものであるにすぎないのである。

B. 専門社会事業の有限性一人間の営みとしての専門社会事業であるから、それにはおのずから限界がある、有限的なものであることはいうまでもない。我々はどうしてもその有限性 finitude をみとめざるを得ないのである。ことにワーカーによる「自己覚知」ということは、いままで社会事業はただ対象者を理解し、かかる理解に基づいて、対象者のために何ごとかをしてやるといった性質のもの如く考えられて来たのに、今や専門社会事業は人間関係の展開過程であり、従って関係の一端に立つワーカー自身のあり方、および行為が問題にされねばならぬということの意味するものと考えられるようになった。かくしてワーカー自身の実存が深淵のように、ワーカーの眼前に現われて来て、自らのいかに小さく、また無力な、そして有限な存在であるかということに気づかざるを得なくさせられる。もちろん社会科学は従来未知、或は神秘とされていたことについて、我々を大いに啓発してくれた。特に精神分析学によって、人間の無意識というものの理解が非常に深められた。この無意識という概念で、ポーロの嘆きのことば「わたしは自分のしていることが、わからない。なぜなら、わたしは自分の欲する事は行わず、かえって自分の憎む事をしているからである<sup>5)</sup>」とっていることなどは、大いに理解できるわけであるが、しかし決して我々はかかる人間の実存について、精神分析学によって完全な理解をなすことはできないし、いわんやかかる問題を、完全に解決できるなどと考える者はないと思う。人間の不安は「死にいたる病」であるとケルケゴールはいつている。またアウグスチヌスは「我々の心は汝のうちにて、いこいをうるまでは安きを見出し得ないであろう<sup>6)</sup>」といつているが、これはフロイドの「原不安 basic anxiety」という概念や、或はホルニー Karen Horney がこの同じ概念で人間の人格発達と、その問題とを解明しようとしたこと、或はまた哲学的に絶望 hopelessness といわれることは、社会心理学的には孤立無援 helplessness ということと同意義に解され得ないではないが、しかもこれらのことは決して人間や、その問題を全面的に説明したり解

決したりするものではない。かかる科学的理解がいかに進んでも、遂に人間の実存や、本質そのものについては到底理解しつくし得ないものがなお多くのこされるものと考えねばならない。故に人間は遂に福音を信じて義認され、救いにいたらしめられる「恩恵の賜物」を祈り求める他はないと福音主義は主張するであろう。

かくして人間にはなお多くの理解も、解決も不可能、或は困難な問題がのこされているのであるが、しかも福音主義は「人にはそれはできないが、神にはなんでもできない事はない<sup>7)</sup>」というし、また「すべて神から生れたものは、世に勝つからである。そして、わたしたちの信仰こそ、世に勝たしめた勝利の力である。世に勝つ者はだれか。イエスを神の子と信ずる者ではないか<sup>8)</sup>」という信仰をもと人間に命ずるのである。専門社会事業は「荒野で呼ばわる者の声がある、『主の道を備えよ、その道筋をまっすぐにせよ』<sup>9)</sup>」と記されたバプテスマのヨハネにた役割をはたす者といえないであろうか。

C. 人間の全生活に浸透する福音—ナザレにおける初期の説教でイエスは預言者イザヤの書から次のような言葉を引用した。

「主の御霊がわたしに宿っている。貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、わたしを聖別して下さったからである。主はわたしをつかわして、囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ知らせ、打ちひしがれている者に自由を得させ、主のめぐみの年を告げ知らせるのである<sup>10)</sup>」。

このことはシェリルもいう如く、象徴的な意味を含んではいるが、イエスの宣教の全体の記録によって明らかのように、イエスが肉体的、神経的、精神的、社会的、経済的或は政治的等人間のあらゆる問題を、福音の力によって解決すべき範囲内にあるとなしたことを示すものであり<sup>11)</sup>、イエスは現に肉体的な病人を癒したり、精神的に悩む者を正常にしたり、経済の問題を論じたり、政治の正しい姿を示したりしたのである。

福音と人間の现实生活との関係について、神学者の間に必ずしも意見を同じうしているとはいえ

ない。筆者はかかる問題について、神学的に何の意見もいうべき資格はない者である。筆者はただイエスが現実的に言い、またなしたことをここに記するだけである。いうまでもなく福音主義は神中心のものである。故にいかなる事態に対しても神中心の態度をもつてのぞむ他はない。即ち福音主義を説いたポーロもまたその後の多くの聖者たちもアガペー愛を説き、またそれへの信仰をもち、现实生活における人間がアガペー愛への悔改めと、応答という緊張関係に生きるところに我々は基督者の人生の真の意義をみとむるものである。

- 註1) 新約聖書マタイによる福音書第10章35—37節。  
 2) 同 第19章29節。  
 3) 同 エペソ人への手紙第5章31節。  
 4) J. Wach: *Sociology of Religion*, 1954, p. 337.  
 5) 新約聖書ローマ人への手紙第7章15節。  
 6) J. Wach: *op. cit.*, p. 376.  
 7) 新約聖書マタイによる福音書第19章26節。  
 8) 同 ヨハネの第1の手紙第5章4—5節。  
 9) 同 マルコによる福音書第1章3節。  
 10) 同 ルカによる福音書4章18—19節。  
 11) L. J. シェリル「罪の心理とその救い」, 236頁。

## 6 結 語

以上神学者でも、宗教学者でもないのに、筆者は専門社会事業と福音主義との関係について、まことに粗雑ではあるが、一応の考察をなした。いままでとかく宗教や、信仰と、科学や、科学による実践とが、むしろ相反するものであり、各々は他と対立するか、他を否定するか、いずれかを選ぶ他はないとされる傾向が強かった。極端な場合、社会学者の中には宗教や、信仰をむしろ科学的研究や、科学的実践にとって有害なものであると主張する人々もあるようになった。また神学者や、宗教家のあいだにさえ、宗教と、倫理・道徳との間には、ただ相対的差異あるにすぎないと考え、従って科学的実践をつき進めてゆきさえすれば、人間の、或は人生の問題はすべて解決され、我々はもはや信仰や、神学を必要としなくなるであろうといった宗教否定的態度をとったり、或は少なくとも、信仰や、宗教を人間や、人生とその問題の科学的理解や、解決の手段にすぎない

とする人間主義的宗教観が強くなるようにみられた。

密接に結びついているということを我々に示すことになった。特にケースワークにもっとも強い影

しかし一方において科学や、その応用としての実践が進むにもかかわらず、社会的、或は個人的な諸問題の理解や、解決が、むしろますます困難になるだけでなく、新しい多くの問題が次々に生起するという現実を見て、我々はどうしても人間や、人生の実存と、その問題について真剣に考えざるを得なくなった。一方にかかる哲学的、或は神学的な要請が生じ、強化されつつあるときに、他方精神分析学をはじめ、人間の行動や性格を新しい視野から研究する諸科学が著るしい発達をなし、特にこれらが社会事業を社会学的な専門職業として理論づけ、かかるものとしての実践をなさしめることになってから、今までただドグマティックなものであると考えられていた宗教、わけでも基督教の福音主義が、科学的実践ともっとも

響をあたえた分析的な精神療法 analytical psychotherapy も、要するに「受容されるに適しない者の受容 acceptance of the unacceptable」ということであるが、この事を接点として、専門社会事業は宗教と密着することになった。しかし同時に信仰と実践とが、互に異なる次元のものとして存在するというところに、かえってこれら両者が夫々の真価を発揮し得るもののあることを、我々はみとめざるを得ないのである。この粗雑な論者が、専門社会事業と、福音主義との、弁証法的関係について少しでも示唆するものがあり、さらに洗練された研究がなされるために、一つのすて石ともなることができれば、筆者の幸はこれにまさるものがないであらう。

——関西学院大学社会学部教授——